



Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	白川静ブームとその問題点(The Boom of "Shizuka Shirakawa" and its Problems)
著者 Author(s)	田畑, 暁生
掲載誌・巻号・ページ Citation	神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,6(1):37-45
刊行日 Issue date	2012-09
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81004269

Create Date: 2018-03-17



白川静ブームとその問題点

The Boom of “Shizuka Shirakawa” and its Problems

田 畑 暁 生*

Akeo TABATA*

要約：漢字ブームの一環として「白川静ブーム」があるが、それにはさまざまな問題点もつきまとっている。本稿では、第一節において、白川静ブームの実態および盛衰を、その関連書籍の多さや、新聞記事での言及などのデータに基づいて述べる。第二節においては、白川静の字源説の中心である「サイ」学説について、内在的な形でその批判的な検討を行っている。そして第三節では、白川静への批判の中心であった藤堂明保と白川静の論争を紹介し、また、白川静ブームにどのような問題点があるのかについて、特に仮説に過ぎない「サイ」学説が「真理」として広められがちな傾向について、懸念を示している。

1. 白川静ブームのありさま

漢字ブームと言われて久しい。漢字ブームの総体については別稿を執筆中なのでここでは詳しく触れないが、要約すると日本における漢字ブーム自体は、1990年代に始まり、2000年代に漢字検定受験者の爆発的な増加を代表的事例として言及が増え、そして2009年の麻生首相の国会での「漢字の読み間違い騒動」や、漢字能力検定協会の金銭スキャンダルで盛り上がりを見せたのち、一定の収束をみた、と言える。本稿で扱うのは、漢字ブームの一翼とも言え、また、それ自体が一つのブームとも言える、「白川静ブーム」である。

このブームの中核にあるのはやはり、関連書籍・雑誌等の出版物の多さだろう。時にはテレビ番組にもその字源説が取り上げられるが、中心は活字出版物であろうと思われる。

白川静自身の一般向けの最初の著作は岩波新書の『漢字』（1970）である。さらに中央公論社から『詩経』（1970）、『孔子伝』（1972）、『中国の神話』（1975）、『中国の古代文学』（1976）、『漢字百話』（1978）、『初期歌謡論』（1979）、『後期歌謡論』（1995）、講談社から『中国古代の文化』（1979）、『中国古代の民俗』（1980）を出しているが、最も著作を多く出しているのは平凡社で、「字書三作」として知られる字源辞典の『字統』（1984）、古語辞典の『字訓』（1987）、漢和辞典の『字通』（1996）を初め、エッセイ『文字逍遥』（1987）『文字遊心』（1990）、『回思九十年』（2000）、『字書を作る』（2002）、『文字講話 1-4, 続』（2002-2007）、『桂東雑記 1-5, 続』（2003-2007）、『漢字の世界 1・2』（2003）および、

全12巻の『白川静著作集』本巻と、自家版として白川がまとめた『説文新義』『金文通釈』『甲骨金文学論叢』を著作集の別巻としてそれぞれ全22巻で出版している。白川静ブームを「仕掛けて」いるのも、平凡社が主と言える。2001年には別冊太陽で、『白川静の世界 漢字のものがたり』を、2005年からカレンダー「漢字暦」を出し、2008年には松岡正剛に平凡社新書で『白川静』を書かせ、2010年には追悼の意を込めて『白川静読本』を出している。

別冊太陽『白川静の世界』は、文物や祭祀だけでなく、白川が甲骨文字をトレースした草稿などの多数のカラー写真を掲載し、梅原猛や岡野玲子との対談、そして、白川の中心学説である「サイ」についての解説などを含んでいる。「口」（サイ）を「戈」の上にかけてものが「裁」や「裁」の上部だとするのだ。『白川静読本』は、五木寛之と松岡正剛の対談に始まり、五十人の論者が文章を寄せているが、ほぼ白川礼賛一色と言ってよい。

それに対して、平凡社以外の雑誌の白川静特集には、多少の批判的検討も含まれている。一つは、2007年の『大航海』（新書館）63号、特集「白川静と知の考古学」、もう一つは、『ユリイカ』（青土社）2012年1月号、特集「白川静 100歳から始める漢字」である。

さらに数が多いのが、『分ければ見つける知ってる漢字—白川静先生に学んで漢字の学習システムをつくる 宮下久夫遺稿集』太郎次郎社（2000）など、別の著者が、白川静学説を、児童や一般読者のために、「わかりやすく」リライトしたものや、教材・教具の形にしたものである¹⁾。

前述『分ければ見つける知ってる漢字—白川静先生に学んで漢

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2012年4月1日 受付)
(2012年7月17日 受理)

字の学習システムをつくる 宮下久夫遺稿集』の著者である宮下久夫氏というのは、長らく小学校の教師をしていた人らしく、他にも『漢字がたのしくなる本』(全6巻)『同ワーク』(全6巻)などの児童向け図書や、「漢字カルタ」「部首カルタ」「形声文字カルタ」「あわせ漢字ビンゴゲーム」「漢字組み立てパズルセット」などの遊具を多数出している。私はひとつひとつは未見だけれど、これらがおそらくみな白川静説に基づいたものであることは想像に難くない。

タイトルや副題に白川静の文字が入っていない関連書も少なくない。例えば、山本史也という人の漢字関連著作に『神さまがくれた漢字たち』(理論社, 2004), 『図解雑学 漢字のしくみ』(ナツメ社, 2008), 『古代の音 続・神さまがくれた漢字たち』(理論社, 2008), 『字の記憶』(ラゲーナ出版, 2011)とあるが、このうち『神さまがくれた漢字たち』のみ、白川静の監修で、「まえがき」も白川が書いているが、他の本は一見しただけでは、白川関連書であることは分からない。著者の経歴に「白川静最後の直弟子」「文字文化研究所副所長」とあるのを見てはじめて、分かる仕組みとなっている。

ところで、漢和辞典を出版している出版社は数多いが、そこに新潮社が2007年、「日本語としての漢字・漢語」を解説することに主眼を置いた『新潮日本語漢字辞典』を上梓した。その際に話題となったのは、白川静自身が著した辞書以外で初めて、字源説に全面的に白川学説を取り入れたことである。それまで、例えば学研であれば藤堂学説、角川であれば加藤学説で字源を、それ以外であれば「説文解字」に戻るか、あるいは折衷的な判断を述べたものが多かった。

続いて、白川静ブームの盛衰を知るために、どの程度新聞記事に登場しているのか、朝日、毎日、読売、日経(正確には日経系の日経流通、日経産業等を含む)、データベースの数字から追ってみよう。各新聞データベースを文字列「白川静」で検索し、「白川静子」「白川静男」「白川静明」等を指した記事や、同名でも明らかに別人に関する記事を除くと、その結果は以下の表ようになる。

1970年代は6記事、80年代は15記事だったものが、90年代後半に急増して、1年に20から30以上の記事はコンスタントに出ていることが分かる。日経は「経済紙」という性格上、他の新聞より関連記事は少ないが、1999年のみ跳ね上がっている。これは12月の「私の履歴書」が、白川静であったためである。朝日新聞大阪版の1998年5月19日付け記事「4864人で前年より448人減 県内高額納税者 /兵庫」では、現在は「個人情報保護」によりまず掲載されることがなくなった納税者番付の記事であり、その「近畿の各界の高額納税者」の「文筆家・美術家」部門の第10位に、白川静が納税額2174万円で登場しているのは注目に値する(1位は西村京太郎の21257万円で、他に高村薫、宮本輝、河合隼雄、筒井康隆などがランク入り)。推定年収はこの2倍程度であろうが、原稿料や印税、講演料などでこれだけの収入を得ていたことは、まさにブームの証拠と言えるからである。

21世紀に入るとさらに記事数は増え、2004年から2010年まで、コンスタントに50記事を超えている。2002年7月16日付け毎日新聞(東京朝刊)記事は、白川静ブームを示す典型的なものだろう。

表：白川静を扱った新聞記事数

年号	朝日	毎日	読売	日経	合計
1971-1980	4	0	2	0	6
1981-1990	2	0	3	10	15
1991	5	3	3	2	13
1992	3	1	0	0	4
1993	1	0	2	1	4
1994	0	3	2	2	7
1995	2	1	1	0	4
1996	10	9	4	2	25
1997	12	4	5	6	27
1998	10	8	7	3	28
1999	9	10	4	34	57
2000	18	16	8	1	43
2001	14	9	4	9	36
2002	14	12	9	7	42
2003	14	8	7	4	33
2004	30	23	21	7	81
2005	29	13	24	12	78
2006	29	29	28	16	102
2007	35	15	13	8	71
2008	30	5	13	9	57
2009	33	14	21	7	75
2010	20	20	32	7	79
2011	14	8	15	5	42

山田孝夫記者が「白川静現象」と題して、「文字講話」を聴講した体験談を記している。「白川の人気は今や最高潮に達した感がある。はたして京都国際会館アネックスホールの650席は全国から詰めかけた聴講者で満杯となった。やはり年配者が目立つ。開場前から行列ができ、開場と同時に駆け足でイスを争うにぎわいだった。(中略)これは単に漢字マニアが増えただけという現象だろうか。人生において真に価値あるものとはなにか、それを誰かに教えてもらいたいという切実な思いから、人々は「文字講話」に参加するのではないか。明らかに戦後日本の「経済大国」路線の転換に触れる動きだと思う。経済大国路線の転換というのは明らかに誇大な表現と思われるが、一部の人たちが熱狂的に白川の学説に聞き入る「熱気」は伝わってくる。

そして白川が亡くなる2006年にピークを迎え、記事数も100を超える。死亡記事や追悼記事が多く出たためもあるだろう。その後は漸減傾向にある。

2. 「サイ」学説

前述の著書の名称から分かるように、白川静の業績は、中国古代に関する人類学的な仕事から、孔子論、万葉集論まで多岐に渡っているが、本稿が主題とする「白川静ブーム」の中で、一般に大きな影響力を持ったのは、何といてもその字源説である。新た

に発掘された甲骨文や金文（青銅器などの表面に刻まれた文字）をトレースすることで、その形の中から字源や深い意味を読み解くのが、白川の字源説の方法であると言ってよい。

白川静が登場する以前の日本における字源研究は、東大教員である加藤常賢と藤堂明保の二人が権威であった。白川の最初の一般向け著作である岩波新書の『漢字』でも、この二人の『漢字の起原』（但し、角川から一冊にまとまる前の、斯文会による分冊版）、『漢字語源辞典』は、参考文献に挙げられている。現在でも、日本における字源研究の権威は、白川を含めたこの三人と言ってよい。

加藤常賢の『漢字の起原』は、許慎「説文解字」（字源研究の古典的著作）に最も忠実なもので、加藤の納得がいかない場合にのみ、後世の学者の説や、あるいは加藤自身の説が、字源説として採用される。藤堂明保『漢字語源辞典』も、「説文解字」の説を採用する的多いけれども、カールグレンによる中国古代の音韻の再現説に基づいて音韻を重視し、字形ではなく音の似ている漢字をまとめる（「単語家族」という）方法が積極的に採られており、これが藤堂の独創と言える（そこが批判される場合もある）。

たとえば「方」（ホウ、かた。ちなみに、旗や旅などの左にある「方」は旗竿の象形であって別字）字の字源について、「説文解字」では、「船を並べた形」と説明する。しかし、加藤常賢はこの説を退け、中国の徐仲舒による、「スキ（農具）の形」とする説を採用する。藤堂も同様に、「スキの形」とするが、さらにこのスキの形が「左右に刃が出ている」ところから、「方」を含む「房」「妨」「防」などの字や、音韻が似ている「丙」「並」などと共通に「四方に張り出す」という意味があるのではないかと指摘する。それに対して白川は、「方」字は、「横に渡した木に、屍体をつるしている形」という全く新しい説を立て、さらし首の意味であるとし、「方位」等の意味に使われるのは、「さらし首」が「境界の呪禁となっているから」という、独創的な主張を行うのである。

白川静の独創の中でも代表格とされるのは、いわゆる「サイ」学説である。それまでの一般的な字源説で、口（くち）とされてきたものの多くが、「くち」ではなく祭器に由来するという説である（『字統』など白川静の著作では、特別にサイを表す手書き風の文字を作って説明文に入れてある場合が多いが、本稿ではそのような用意はないため、カタカナで「サイ」と表記する）。これらの祭器の音に、白川は「才」の字音の「サイ」を当てる。これがいわゆる「サイ」学説である。まず、最も単純な「部品」であり、謎がないと見られた「口」が、必ずしも「くち」ではないという驚き、「サイ」という別音の付与、そして、関係する漢字の多さ、こうしたことが、「サイの発見」が影響力を持った要因であろう。もちろん他にも、白川が新たな字源説を立てた字は少なからずあるのだが（たとえば前述の「方」や、「ござとへん」を単なる地形の盛り上がりではなく宗教的なものとする、など）、最も知られているのは「サイ」学説である。

この学説を検証するには二段階で考える必要がある。すなわち、「くち」の形に見えるものが「祭器」なのかどうか、そしてその字が「サイ=才」という音で呼ばれていたのか、である。

まず白川の『字統』の中の、「口」字の説明は以下の通りである。



図1：「サイ」の形象

「象形 口の形。{説文} 二上に「人の言食する所以なり」という。卜文・金文にみえる字形のうち、口耳の口とみるべきものはほとんどなく、おおむね祝禱・盟誓を収める器の形であるサイの形に作る。従来の説文学において、口耳の口に從うと解するために、字形の解釈を誤るものは極めて多く、古、右、可、召、名、各、客、吾、吉、舍、告、害、史、兄、祝、啓、品、区（區）、臨、嚴（嚴）などは、みな祝禱を収める器を含む形。また、日に從うとされる曷、者、習、曹、智、曆、魯なども、みな祝禱を収めた器の形に從う。口耳の口に從う字は、おおむね後起の形声字である。もっとも口という字は[書、盤庚、上]、また[詩、小雅、正月]「好言口よりす」、[小雅、十月之交]「讒口囂囂たり」のように、早くから用いられているが、卜文・金文にその明確な用義例がなく、祝禱を収める器の形であるサイとの異同を、確かめることはできない」（p.296）

『字統』などに書かれている、篆文や金文（青銅器などに掘られた字体）における「サイ」の形状は、おおむね図1のようなもので、「くち」の字に出てくるものと形状からは全く区別がつかない。

白川がどのような字に「サイ」が含まれているとするのか、『字統』の中から常用漢字の範囲で抜き出してみると、以下のようなになる²⁾。すると、いわゆる「くにがまえ」を除いて、「口」の形状を上下や中央を含む字のほとんどにおいて、「口」をサイとしていることが分かる。数が多いので画数順に並べた。さらにその字を二次的に含む代表的な字をカッコ内に示した。

- 5画 古（枯、湖、固、個、箇、苦、故）、右、可（何、河、荷、歌）、石（岩、拓、石へんの字）、史、兄（祝）、只、号、司（伺、詞）、占（店、点）、句（拘）、加（架、賀）、召（招、紹、詔）
- 6画 各（格、客、路、略、絡、落）、吉（詰）、后、合（給、拾、答、塔、搭）、吏、向（尚、党、常、堂、賞）、同（銅、胴、洞）、如
- 7画 吾（語、梧）、告、言（信、ごんべんの字）、含、呈（程）、呉（誤、婁）、否、君（郡、群）
- 8画 舍（捨）、和、周（週、調）、命、知、奇（寄、騎）
- 9画 哀
- 10画 唐（糖）、害（轄）、高（稿）
- 11画 商、問
- 12画 品（区、馭、臨、操）、啓、善（繕）、尋
- 13画 聖
- 15画 器

これらの大部分は、従来の字源説（説文解字や、加藤常賢、藤堂明保などの説）においては、「くち」と解されてきたものであ

る。であるので、例外のみ示そう。「石」に含まれる「口」の部分は、従来説では「がけの下に転がっている石ころ」と解されてきた。

逆に、同様に上下等に「口」の形状を含みながら、白川が「サイ」と主張しない字（常用漢字内）には、「貝」や「舌」「谷」「或」「哲」がある。このうち「貝」については、白川説においても従来の字源説においても変わらず、丸い記号とされている。「舌」（した）について白川は、「口内から舌が出ている象形文字」としているので、この「口」はくちと考えてよいのだろう（但し問題が複雑なのは、「舌」（した）と楷書で区別がつかない「活」などのつくりについては、「氏」と「サイ」の組み合わせとされていることである）。また「谷」（たに）についても、「谷」（たに）字の場合には、下部は谷の入り口の狭まった形としているのだが、それと楷書で区別がつかない「浴」や「容」「欲」のつくりの部分については、祝禱の器である「サイ」から、神気が彷彿として表れる字形としている。「或」の内部に含まれる「口」の形のものは、「国」と同様に、囲いを表す「口」（イ、現代の字では「困」）であると、し、「哲」の下部については、「くち」とも「サイ」とも記述がない。

そして問題は、「口」の字形が「左」にくる、いわゆる「くちへん」に属する字である。以下で具体的に見ていくように、「くちへん」の字のほとんどにおいて白川は、「サイ」とも「くち」とも明記していない。氏の代表的な字源辞典である『字統』の実際の記述で確認しよう。

例えば「吐」字の字源の説明は「形声 声符は土（と）」と書かれている（p.659）。「声符」というのは、その漢字の字音がどこに由来するかの説明で、ここでは「土」の「ト」という音が、そのまま「吐」の「ト」という音になったことを示す。これ以降も、説文解字の引用などから説明は続くが、「口」が「口耳の口」なのか、それとも「サイ」なのか、一切説明がないのである。

「吐」に限らない。まず常用漢字の範囲で、いわゆる「口へん」の字を調べてみたが、「叫」「吸」「吟」「呼」「味」「唆」「喝」「唱」「喚」「喫」「嘆」「囁」「噴」「嚇」の各字についての説明は、上記の「吐」とほぼ同様で、「形声 声符は○」と書かれているのみであって、「口」が口耳の口なのか、器のサイなのか、一切書かれていない。

「口」が左に来る常用漢字内で、「サイ」と明記している字は「吹」「唯」「鳴」の3字のみである。「吹」は「会意」で、「口と欠に従う。（中略）金文の字はそれに祝禱の器であるサイをそえる。祝禱の器に対する何らかの呪儀を示す字形である」（p.500）とする。この字源説に私は不信感を抱くが（「吹く」という意味については、口耳の口と素直に解する方が納得しやすいうえに、何らかの呪儀というのは極めてあいまいな言い方であるから）、サイと明記していることは分かりやすい。「唯」は「隹（すい）と口（サイ）との会意。（中略）（説文では）口（くち）に従う形声の字とするが、唯や鳴の従うところは口（くち）ではなくサイの形。サイは祝禱の器の形であるから、これらは鳥占を示す字とみられる。それで唯は承認を示し、唯諾の意味となる（後略）」と説明される（p.19）。「鳴」字の説明もほぼ同様で、「鳥占のしかたを示す字」（p.850）とされる。

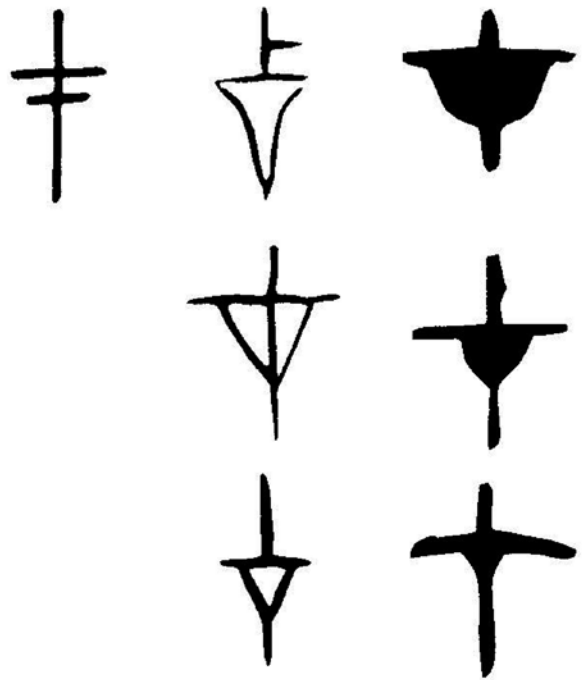


図2：「才」字の篆文、甲骨文、金文の形象
（左から、篆文、甲骨文、金文の例）

「くち」とされているものの中に、「くち」ではないものが混じっているという着眼点は鋭い。確かに、その可能性はあるだろう。しかし、（偏として左につくもの以外の）「口」のほとんどを「サイ」だとするのは、むしろ牽強付会の感がある、例えば、「品」や「器」字に含まれる「口」字は、現在の意味から類推するだけだが、ひょっとしたら「くち」ではなく「器」の象形なのかもしれない。しかし、意味の上でも「くち」に関連する字まですべて「祭器」とされているのはいかなるものか。

さて、もう一つ、この字の音が「サイ」だとする説についてである。これを「サイ」と白川が呼ぶのは、「才」字に含まれているとするためである。

『字統』における「才」字の説明は以下の通りである³⁾。

「標木として樹てた木の形横木を著けた十字形のもので、榜示用の木の形。その縦横の交わるところに、祝禱を収める器の形であるサイをつける。サイはときに小さな肥点で示されることもあるが、いわばお札をつけた形とみてよい。神聖なところの表示としてこのしるしを立てる。（中略）才の声は、おそらく祝禱の器を意味する「サイ」に従うて、その声をえたものであろう。サイとは載書（盟誓の書）をいう」（p.347）

そして篆文として複十字のような形が、甲骨文として十字に下向きの三角形を付した形が、金文としては十字の交点に「肥点」（割と大きな点）を付けたような形が示されている（図2を参照）。

白川はここで、才字の「サイ」という音が、この肥点などで示される「祝禱の器」から来ているのではないかとし、そこから、祝禱の器の音自体もサイであった、と推定するわけである。

この推定自体もかなり危ない橋を渡っている感はあるが、致命的と思われるのは、この原型として篆文や甲骨文、金文で示された図形が、「口」の図形とはまるきり似ていないことである。十字の交差する所に重ねられた肥点であったり、逆三角形であったり、

十字の下の横棒であったりするが、図1で示した、「口」を含む字の古代文字にあるあの図形とは、大きく違っている。これまで「サイ」としてきたが、あの図1の図形の字音が「サイ」である蓋然性は、相当に低いのではないか。

もう一つ、白川に不利なのは、「口(サイ)」を音符として含む字がないことだ。「才」を音符して含む字はある。それは例えば「材」「財」「在」「栽」「裁」「載」などである。もしも「口」を含む字で、それが字母となり音「サイ」を残している字があるならば、それは「サイ」学説の傍証となるが、「口」を含む字で音が「サイ」なのは、「哉」くらいである。この「哉」については、音は「口」から来ているというよりは、「裁」「栽」「載」同様に、「戈」の上にある「才」に由来すると考えるべきだろう(白川は「哉」については、「口」の部分も「サイ」であり、さらに「才」も含むとしているから、ある意味「サイ」が二重である)。

もっとも「口(くち)」のような部首字は、それ自体が字母(音符)になることは少ない。「口」を含む字で、音が「コウ」や「ク」であるならば、「口(くち)」が音符であると考えられるが、そのような字は、『字統』において挙げられているのはただ二つ、「釦(コウ、ぼたん)」「扣(コウ、ひかえる)の二字だけである(ちなみに「和」は「禾」が、「如」は「女」が音符)。

実は他の説では、「口(くち、コウ)」が音符とされる字はもう少しある。例えば「叩(コウ、たたく)」について、藤堂説では「口(コウ)」が音符だが、白川説では、左部はくちではなく「台の形」であり、会意であって形声(いずれかの部分の音を全体の音とする)ではないとしている。白川の説明はご都合主義的に感じられ、藤堂説の方が説得力がある。

常用漢字外の「口へん」の字について、白川『字統』の記述を調べてみても、「くち」もしくは「サイ」と明記したものはほとんどない。ただ、「ほえる」を意味する「吽」「吠」の説明文において、「会意 牛と口にしたがう」(p.43)「会意 口と犬にしたがう」(p.705)と書いてあるだけであり、他は「音符は○」としているのみなのである。したがって『字統』において、「くち」と明記してある字は、「口」自体の他は、「釦」「扣」「吽」「吠」の4字に過ぎない。「口」が字の左側に付く「口へん」の形声字については、当然「くち」と考えてよい、ということなのかもしれないが、読む人によっては、「口」はすべて「サイ」と考えかねない不親切さではなからうか。「サイ」学説を目立たせるために、「サイ」を含む字を増やし、「くち」を含む字については明記しない、と記述を操作しているとさえ考えられる。たとえそれが無意識に行われているとしても。

3. 白川静ブームの問題点

以上論じてきたように、白川静の字源説は「仮説」にとどまっておき、「真実」ではなからう。特に字音を「サイ」とする根拠は薄弱と言わざるを得ない。それを金科玉条のように崇めたてまつることは、むしろ学者としての白川静をおとしめるものではなからうか。あるいは、小谷野[2007]が言うように、「蔭でトンデモよばわり」するだけで、「正々堂々と批判する」専門の学者がいないことが問題なのかもしれない⁴⁾。

白川静と他の学者との論争があったのは1970年代、白川静の『漢字』(岩波新書)に対して、藤堂明保・東大教授が同じ岩波の雑誌『文学』で批判、それに対して白川が反批判を行ったというのが代表的なものである。

白川静『漢字』は、六章構成で、「一 象形文字の論理」「二 神話と呪術」「三 神聖王朝の構造」「四 秩序の原理」「五 社会と生活」「六 人の一生」となっている。第一章の「文字の起源的な研究には、まず甲骨文や金文によって、その本来の正しい字形を把握することが必要である。その形象の意味するところを、当時の観念や思惟方法に従って理解するのだからなければならない」(p.21)というところに、白川の方法が要約されている。以降は、呪術などから古代中国人の生活のありさまを推定し、それに従って様々な字の解釈が語られる。

これに対して藤堂は、『文学』に7ページにわたる書評を載せている。「一 ことば研究の方法」では、音符が共通する漢字の共通の意味がある事例の紹介から、「上古漢語における語形をとらえて、数多くの漢語を分類し「帰納法」を用いてその基本義を明らかにしていくのが、古代語の言語学的研究の正道なのである。(中略)ことばの本質は「語音と特定の意味との結びつき」という点にあるのであって、文字というのは、そのことばを視覚に訴えて表す道具にすぎない」(p.107)と、音韻論が言語の中心であるべきとの主張が述べられる。「二 本当かうそか」では、白川の字源についての各論で、「我」「年」「字」「名」「眼」「限」などが事例に挙げられる。「三 用途を誤るな」で「民俗学的・宗教学的な知識をもちこんだ方法」は、主観的であって方法論がないと批判、文字を複雑に理解するのは本末転倒、とする。「四 まとめ」で、「要するに白川さんのこの書は、「漢字のなりたち」を説いた書としては、どうもふさわしくない。そうではなくて、古代に発した宗教儀礼が後世にどう変貌し、古代人の心がどのように後世の事象に反映したか、という中国の文化史の一つとして読めば、たいへんおもしろい」「ことばの問題はまず語学畑の者にきくべき」「いかめしい説明がいちいちの漢字に加えられると、ある種の人びとは漢字の「ありがたさ」をいよいよ身にしみて感じて、随喜の涙を流すかもしれない。「漢字をふやせ」「漢字はおもしろい」「神秘的なほどの背景をせおっている」といった論調をけしかけられるかもしれない。どういう連中がそれを言い出すかは、もう目にみえている」(p.112)と、穏やかならぬ終わり方をする。簡単に言えば、右翼国粹主義的な人間が、漢字を利用しようとしている、と言いたいのであろう。それを、良心的な知識人である自分が批判する、という構図である。

特に「名」の字源には、前述した「サイ」が登場する。「白川は、ついでに「名」という字にもふれて、「名」の上部は祭肉、下の口型は祝詞を入れる器で、このとき祝詞を奏上して名を告げる。これもまた加入式である」と述べておられる。「名」という字の甲骨文字は、あきらかに「夕月の形+口」からなっており、その上部は肉ではない。また口印を器と解するのは、白川さんが「中」の字や「告」の口印を「祝詞を入れる器」と解したのと同じやり方であって、どちらも解字の通例には合致しない独特の見解である」(p.109)と手厳しい。さらに、夕べのほの暗い中で、顔も定かに見えぬから、口で名乗ることを意味するという「説文解字」

の説を、「厳粛な原理に立つ古代文字の造型を正しく理解する方法ではない」と退ける白川に対して、「むしろ白川さんの『厳粛な原理』こそがよけいなこじつけ」とまで藤堂は断じるのだ。その後、名、鳴、命、冥といった「メイ」の字音を持つ字には「くらい、見えない」という共通義があるとする自説へとつなげて行く。

白川静の側からの、藤堂および加藤に対する反論が、その二カ月後に同じ『文学』に掲載された「文字学の方法」(のちに『文字逍遥』所収)である。この論文において白川は、藤堂の「単語家族」説を「音義説」、すなわち、ことばの類似を音の類似から説明する説であるとし、それは漢字にはあてはまらないとして批判する。「字の基本形には大きな変化はなかったが、時代音はかなりの変化をしている。音から文字を解釈しようとする音義的な方法は、十分な科学的根拠をもつものとしがたいのである」(p.99)。「章太炎の音義説を、カールグレンの音韻学で改変してみても、そこには若干の思いつきしか生まれない。その思いつきによって逆に資料を解釈しようとするのであるから、解釈は漫画的とならざるをえない」(p.109)。また具体例としては「王」字を挙げ、これを「大」と「于」の合成として解する藤堂に対して、甲骨文の「王」とされる文字を掲げ、まさかりの象徴から王の字形ができたとして、藤堂の「字形」に対する無頓着さを批判する。最期に、「この書評は、あらゆる点で書評としての節度を無視している。特に私の従来の研究について、殆ど知識をもたれていないようであり、驚くべきほど理解が不十分である」とするだけでなく、藤堂の「どういう連中がこれを言い出すかは、もう目に見えている」という、思わせぶりな一語を「全くよけいなことである」と切って捨てている。

藤堂だけでなく、もう一人の字源学の権威である加藤常賢・東大教授も白川静を批判しているが、藤堂ほどまとまった形のものはない。小谷野 [2007] によると、私家版・非売品の『維軒加藤常賢 学問とその方法』(深津胤房編、加藤さだ発行)に、二松学舎大学大学院で行われた講義のテープ起こしが収められており、その中で「あの白川君のものを、広告でちょっと読んだ」「なぜ(説文解字の通りに)読めん、と私は言うんだ」「証拠のないことを言うな、と言いたいんです」と、厳しく放言しているが、それのみである。

活字になったものの中では、加藤の著作『漢字の起原』中の「阜」の上部の形状の説明が唯一であると思われる。この形について加藤は、「説文に「小阜なり、象形なり」とある。しかしこの図形は「小山」の形とは見得ない。(中略)白川静教授は「肉塊」の形と見ている。それについても考察を怠らなかつた」として、白川の学説についても一応検討の対象としているが、結論としては、「臀尻のむっくりと高起した形」との説を述べ、白川の説を斥けている。

白川静は、後に書いた「文字学の課題」(『字書を作る』所収)においては、さらに具体例をあげつつ、加藤および藤堂の両者を批判する。加藤が「南」「文」「灋(法の旧字)」「休」「媚」「舍」の各字について、「文」以外のすべてを「形声」による成り立ちとしていることを、「語原的な興味を追求することは正道でない」として退けている。「形声」を重視することを音声偏重と見たのであろう(『漢字の起原』全体は必ずしも音声偏重と私には見えない

が)。そして、藤堂についても、「士・事・史」など、藤堂が「単語家族」として音声を中心にグループ分けしているものについて紹介したあとで、「一字として首肯すべきものがない」「一見してその稚拙さに驚かされる」と、大変な罵倒を浴びせている。自らの方法を「古代文字を古代社会、古代文化の中でとらえる」ものと誇るのである。

加藤は70年代に、藤堂は80年代に世を去ることとなり、その後、白川を批判する者は表立っていなくなった。長生きした白川は次々と著作を世に問い、本人だけでなく、結果的に、白川静のエピゴーネンたちはそれをあたかも「真理」のように扱い、例えば「口」をおしなべて「サイ」と認識させるような教材や玩具を作ったり売ったりしている。白川の出生地である福井県では、教育委員会や教師たちが「小学校学習漢字解説本」として『白川静の漢字の世界へ』と題する冊子を作り、それにしたがって多くの学校で授業が行われているため、子供たちは早くから「サイ」学説を正しいものとして学ぶことになる(山根 [2009])。その4-5ページの見開き「漢字の歴史」という年表では、日本の昭和時代の項目は「白川博士がサイを発見する」、平成時代の項目は「白川博士の字書三部作が完成する」のみと、あまりに偏っているし、その下の説明項目の『説文解字』に代わる新しい漢字の成り立ちの体系を打ち立てた」という記述も、大仰と言わざるを得ない。「説文解字」の説については、これまでも批判されて来ているし、みな「墨守」してきたわけではない。また、白川の字源説は、確かに古代中国を呪術あふれる社会として描くという点では「体系」があると言えなくもないが、細部において様々なほころびを見せている。

前述の「部首カルタ」のアマゾン(インターネットにおける代表的な物販サイト)でのレビューに、「期待はずれ」として、ある母親の次のような言葉がある。

中学受験のため小学校5年生の息子のために購入しました。遊びながら部首を覚えるというコンセプトは良かったのですが、「くち・くちへん」をある学者が提唱する「サイ」という表現をしており、家族で「なぜくちへんがサイなんだ」ともめました。「しんにょう」も「しんにゅう」と書いてあり、親としては、一般的な表現にしてほしかったです。なので、我が家では「サイ」という表現を「くちへん」と書き換えました。⁵⁾

この「カルタ」がすべての「口へん」をすべて「サイ」としてしているとすれば、それは誤解に基づくものだが、その責任は、2節で述べたように「口耳の口」と考えられる場合や不明の場合にも、それを『字統』で明記せずに、ごまかした記述をしている白川静自身にもあると言えるだろう。

私は「字源説」の(単に好奇心を満たす以上の)実用的な価値は、それによって漢字の「形・義・音」が親しみやすく、覚えやすくなることだと考えている。象形文字の多くは、それが表すものに形が似ており(記号学でいう「アイコン」)、会意文字の多くは分解することによって意味が分かりやすくなり、形声文字の多くは、その音符となっている文字素の音を知ること、共通する音符を持つ多くの漢字の音を推定できる。会意形声文字(会意亦声

文字)であれば、うまくすると意味と音の両方を推定できるかもしれない。

あるいは、一見するとわかりにくい字が、正しい字源を知ることでも分かりやすくなるという効果は確かにある。たとえば「歩」という字を初めて見た子供は、どうして「止まる」と「少ない」で「あるく」という意味になるのか、不思議に思うであろう。この字が「右足と左足を交互に出した足跡」からできた文字であることは、どの学説でも共通した定説となっている。つまり、下の「少」は「すくない」ではなく、たまたま形が(それも当用漢字の字体変更によって)それに一致したものだ、と知ることは、この字の意味にまつわるモヤモヤを解消する効果があるだろう。

しかし残念ながら、すべてがうまくいくとは限らない。例えば「矜持」の「矜」字が、なぜ字音が「キン」ではなく「キョウ」なのか、なぜ「ほこり」という意味になるのか、白川の『字統』の中でも、全く分からないとしている。仮説も立たないほど字源が不明な字もあれば、説が分かれてどれが正しいのか分からない字もあれば、中国の古代の音韻を知らなければ納得できない説もある。現代日本人が漢字を覚えるのに、中国古代の音韻まで覚えなければならないとしたら、よほどの暇にある人や好事家でなければ、ある意味「本末転倒」であろう。

その点では、かつての「石井式」や「下村式」のように、子供に教えるためと割り切って、分かりにくい字源の字については積極的に、真実よりは「分かりやすくもってもらいたい嘘のなりたち」を教える、という選択肢もあり得る(但しいずれの時に「ネタばらし」をする必要は出てくるだろう)。あるいは外国の漢字学習者向けの「おぼえかた」として、例えば「学」の字を、「ツ」(かざり)と「ワ」(帽子)と「子」とに分けて、「かざりのついた帽子をかぶった子供が学校に行く」と連想させて漢字を覚えさせる、武部[1993]のような仕事がある。これははじめから、「成り立ち」と称していない。

しかし、仮説にとどまるものが白川の関連本であたかも真理であるかのように語られているとしたら、その責は白川本人が負うべきであろう。

齋藤希史は、『古典日本語の世界 二』(2011)に掲載したコラムにおいて、白川静ブームに苦言を呈している。齋藤は、白川静ブームの理由を、(1)漢字の起源を、古代呪術社会という、従来とは異なる原理で説明していること、(2)漢字の真の姿を、中国人ではない日本人の学者が解明したと受け取られたこと、の二点にあるとし、この二点は、呪術文明を捨てて成立した、「中国の古典的秩序」を排除することになりかねないと、危惧を表明しているのだ。白川の字源説の「一貫性」が、学問的な謙欲さを犠牲にした、呪術的なものへのこだわりから生まれているとしたら、それは大きな問題であろうし、これまで論じてきたように、その側面はないとは言えない。

「不遇」という物語も、ブームの誕生に影響したかもしれない。白川は福井県の貧しい家庭に生まれ、当初高等教育への進学を果たせなかった。大阪に出て法律事務所の書生となったことから運が上向き、夜間高校卒業、中学校の教員をしながら立命館大学専門部で学ぶ。その後の「出世」はむしろ、大学院重点化のもとで数が急増した現代の不遇な院生たちの平均より早いかもしれない。

大学を卒業した32歳ですぐさま予科の教授に任命され、44歳で立命館大学の教授となる。但し、一般に知られるようになるのは60歳での岩波新書『漢字』の出版、さらに定年後のいわゆる辞書3部作の刊行以後だから、「遅咲き」とは言えるだろう。その後は各賞を受賞し名誉を得る⁵⁾が、さらに、論文「文字学の課題」等で、藤堂明保、加藤常賢という二人の東大教授の学説を手厳しく批判したことも、判官鼻屑の日本人に快哉を叫ばせたのかもしれない。

白川静が一般向けの著作『漢字』を記したのは1970年のことだが、「白川静ブーム」と呼ばれる現象が生じたのは、新聞記事や関連書籍の数からも、前述したように90年代後半以降、21世紀に入ってからのことになる。政治的には、社会党(現在の社民党)を中心としたいわゆる「革新勢力」が退潮し、「戦後民主主義」の理想は一層退潮していった。革新勢力は、言語表記についても「合理化」を求め、「漢字制限」と結びつきやすい。政治的には「左派」であった藤堂が、保守派が漢字利用を持ちだすのを、警戒していた通りである。ある種の保守帰帰の雰囲気醸成された。近年ようやくおさまった感はあるが、90年代には宜保愛子、21世紀に入ってから細木和子といった霊能師、占い師がテレビを中心にマスコミで「活躍」したのも、合理性への信頼が弱まったことと関係しているだろう。オウム真理教のカルト性が暴かれたことでいったんは弱まったものの、霊や呪術への許容度は、革新政党が躍進し革新自治体が次々と誕生した時期と比べれば、はるかに上がっている。日本経済はバブル崩壊から回復せず、経済成長を遂げる中国に急迫される。日本人は心の奥で、中国から「漢字」という文字を借りて文章を記述することに、負い目を感じているところがあると思うが、漢字の字源研究に関して、中国の学者を超えたとすれば、一矢報いた感はするであろう。

こうした社会風土の中で、白川の学説は人気を博していった。「サイ」学説の核心は、「くちとされていた形象」が実は、「祝禱に使われる祭器」であるとし、それをういた漢字が多数あるとして、漢字にある種の一貫性を描きだすところにある。「サイ」学説以外においても、前述したように「方」を「屍体」とするなど、呪術性にあふれている。それを受け入れる政治的・文化的雰囲気および、「漢字研究で中国を抜いた」というナショナリズム的発想が、白川学説の人気を高めたとは、言えるのではなからうか。

内閣府の「外交に関する世論調査」では、「中国に対して親しみを感じる」人の割合は、1980年の78.6%から一貫して低下し、90年代後半には4割から5割程度、そして21世紀に入ってからは3割台、2010年には20%にまで低下しているのだ(2011年は反動かやや持ち直している)。こうした数字と、漢字ブームが同居しているとすれば、それはとりもなおさず、齋藤が指摘したように、今の中国はイヤだが、古代の呪術的な中国は素晴らしかったといった見方につながりかねない。

むろんこうした世の動きにまで、白川に責任があるというのではない。白川に責任があるとすれば、「口」の多くが「サイ」であるかのような記述をし(「くち」の場合は曖昧な記述に終始し)、エピソードがそれを広めるのを止めなかったところにある。

4. おわりに

本稿ではおもに批判的観点から叙述を進めてきたが、白川静の学問的な貢献を貶しめようとする意図は毛頭ない。むしろ、白川静が中国人も検討しなかったさまざまな史料を読み解き、深く思索しただけでなく、大部の辞書の形でそれを一般人にも近寄りやすくしたことは、文化への大いなる貢献であろう。しかしだからこそ、白川の仮説を真理として受け取り崇めたてまつってはならない。「苦学」「晩学」「東大教授との批判の応酬」といった物語が人々の魂を揺さぶったのかもしれない。あるいは、「白川静氏の研究室は、大学紛争の真直中でも、こうこうと研鑽の灯りが途絶えることはなかった」に始まる、吉本隆明が白川の著書『孔子伝』の帯に書いた紹介文が、白川の研鑽は特別だとする神話をあおったのかもしれない⁶⁾。しかしそうだとすると、白川が描くような、古代中国の神権の世界から、現代がほとんど進歩していないということになるのではないだろうか。もちろん「トンデモ」として一蹴するのは論外である。必要なのは冷静かつ客観的な検討であろう。もちろん、何らかの新しい考古学的な史料が発見され、これまで分からなかったことが外在的に明らかになるのが学問的な進歩のためには最良だろうが、それがなくても、学説を内在的に矛盾ないかどうか検討したり、あるいは字の各論において字源説同士を比較検討することはできるだろう（加藤説や藤堂説を「真理」として受け取るべきではないことは言うまでもない）。そしてそれこそが、白川が求めていることではないのだろうか。立命館大学は「白川静記念東洋文字文化研究所」を設立したが、その役割が、単に白川静の学説を広めることだとしたら、あまりにも空しい。同じ立命館大学には現在、「石」の字源について注目すべき新説を立てた若手古代中国史家の落合淳思氏も在籍している。落合は著書『甲骨文字小字典』（2011）の中で、「石」字に含まれる「厂」の部分は「がけ」ではなく、石磬（せきけい）という三角形の石製打楽器の象形ではないかとの新説を提出しているが、こうした新説と「対決」し、いずれが正しいのか衆智を集めて検証していくことが、むしろ望まれる役割ではないのだろうか。

注釈

- 1) 「白川静」で検索して出てくる、白川自身以外の著作物を例示すると、小山鉄郎『白川静さんに学ぶ 漢字は楽しい』（共同通信社、2006）→ 2009年に新潮文庫化
小山鉄郎『白川静さんに学ぶ 漢字は怖い』（共同通信社、2007）
小山鉄郎『白川静さんと遊ぶ 漢字百熟語』（PHP新書、2009）
伊東信雄『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界 動物・植物編』（スリーエーネットワーク、2007）
伊東信雄『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界 自然物編』（スリーエーネットワーク、2007）
伊東信雄『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界 人体編』（スリーエーネットワーク、2007）
伊東信雄『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界 人（ひと）編』（スリーエーネットワーク、2007）
伊東信雄『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界 「手と足」編』

（スリーエーネットワーク、2007）

伊東信雄『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界 武器・ことば・祭祀編』（スリーエーネットワーク、2007）

伊東信雄『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界 道具・家・まち編』（スリーエーネットワーク、2007）

はまむらゆう、小山鉄郎監修『白川静さんに学ぶ漢字絵本 足の巻』（論創社、2011）

小寺誠『白川静式小学校漢字字典』（フォーラムA、2011）

福井県教育委員会『白川静博士の漢字の世界へ』（平凡社、2011）

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所『入門講座 白川静の世界 1-3』（2010）

伊東信夫『白川静文字学に学ぶ 漢字なりたちブック 1年生』『同2年生』太郎次郎社エディタス、（2012）

金子都美絵『絵で読む漢字のなりたち 白川静『常用字解』より』太郎次郎社エディタス、（2010）などが挙げられる。

- 2) その他、「サイ」を含むとされる部分を二次的に含む常用漢字として「音」「習」「着」「替」（「曰」（エツ、いわく）を含む）や、「過」「禍」（「𠂔」に「サイ」が含まれる）、「沿」「鉛」（つくりの部分にサイを含む）などもある。
- 3) ちなみに「才」字について、説文解字では、草木が地面を貫いて伸びて行く形、としているが、加藤常賢はこの説を採らず、董作賓による「土が川を塞いでいる形」（「災」の上部と類似）という説を採用している。藤堂明保も加藤に似ているが、「川をせきとめるセキの形」だとしている。
- 4) 小谷野 [2007], p.138. 但し、藤堂明保の弟子筋にあたり、自らも字源に関する著作をいくつもものしている加納喜光・茨城大学名誉教授は、雑誌『日本語学』2011年10月号（特集「字源研究の現在」）において、白川静の名を挙げてその字源学を「根本的に誤っている」と批判している（加納 [2011]）。「文字の前に言葉があり、言葉が意味を持つのである。文字が意味を持つとするのは錯覚に過ぎない」として、「字形学」となっている白川の学説を批判するのである。但し気になるのは、藤堂・加納の著作においても「字形」からの判断はないわけではないこと、そして、言語学において音韻のみを重視するのは、表音文字に基づく言語体系を持つインド・ヨーロッパ語形の特徴事情であって、言語学における西洋中心主義に陥っているのではないか、との疑いがある。つまり、漢字を、西洋の言語学で断裁することの是非に対して、懐疑を持つ必要があるのではないだろうか。
- 5) URL: <http://www.amazon.co.jp/dp/4811805232/>
2012年6月26日アクセス
- 6) 以下に例示すれば、毎日出版文化賞特別賞（1984）、菊池寛賞（1991）、京都府文化特別功労賞（1996）、朝日賞（1997）、文化功労者（1998）、勲二等瑞宝章（1999）、井上靖文化賞（2001）、文化勲章（2004）、など。その間、1987年に京都に「文字文化研究所」が設立され、97年に白川静が最高顧問となった。2002年にNPO法人となるが、さらに2006年には、公共性の高い団体のみに認められる国税庁認定NPO法人となり、寄付への税制上の優遇等も認められた。2005年には、母校であり、長く勤めた立命館大学に「白川静記念東洋文字文化研究所」が設立されている。同年、出身地の福井市や居住地の京都市から「名誉市

民」の称号が贈られている。これらが白川の学説に権威を与えていったのは言うまでもない。

7) この紹介文はおそらく、高橋和巳『わが解体』の、次のような表現を基にしている「立命館大学で中国文学を研究されるS教授の研究室は、京都大学と紛争の期間をほぼ同じくする立命館大学の紛争の全期間中、全学封鎖の際も、それまでと全く同様、午後十一時まで煌煌と電気がついていて、地味な研究に励まれ続けていると聞く」。このS教授のモデルとされるのが白川である。高橋和巳は白川と直接の交流があった（高橋和巳を立命館の講師に採用したのが白川だった）が、ここでは伝聞形式の文体となっている。

文献

- 平凡社（編）『白川静読本』平凡社，2010.
- 加納喜光「危ない漢字の字源学」『日本語学』2011年10月号，pp.4-5.
- 加藤常賢『漢字の起原』角川書店，1970.
- 小谷野敦「白川静は本当に偉いのか」『大航海』63号（特集 白川静と知の考古学），pp.132-140.
- 落合淳思『甲骨文字小字典』筑摩書房，2011.
- 白川静『漢字』岩波新書，1970.
- 白川静「文字学の方法」『文学』岩波書店，1970年9月号．pp.93-110. 白川静『文字逍遥』平凡社，1987.
- 白川静『字書を作る』平凡社，2002.
- 白川静『新訂 字統』平凡社，2004.
- 高橋和巳『わが解体』河出書房新社，1971.
- 高島俊男「両雄俱には立たず 白川静と藤堂明保の「論争」」『ユリイカ』2010年1月号（特集 白川静），pp.159-165.
- 武部良明『漢字はむずかしくない』アルク，1993.
- 藤堂明保『漢字語源辞典』学燈社，1965.
- 藤堂明保「書評 白川静著『漢字』」『文学』岩波書店，1970年7月号．pp.106-112.
- 東京大学教養学部国文漢文学部会『古典日本語の世界 二』東京大学出版会，2011.
- 山根一眞「福井漢字教室のヒミツ」『DIME』「新モノのミカタ」31回2009年6月2日号→平凡社（編）『白川静読本』（2010）に再録。